

2017. 1. 20

日本コミュニケーション学会 九州支部



ニューズレター No. 28

目次

1)支部大会報告 (支部大会実行委員長：平野順也)

2)支部活動予定

- ①支部紀要『九州コミュニケーション研究』第15号の投稿論文募集
(紀要担当運営委員：平野順也)
- ②2017年度活動予定 (副支部長：清水孝子)

3)会員からのメッセージ

- ①九州支部の今後の発展を願いつつー第46回年次大会に参加して
(長崎純心大学 畠山均)
- ②私の研究テーマーポピュラー・カルチャーとナショナリズム (熊本学園大学 松島綾)

4)支部会員の紹介

- ①新支部会員 (西南学院大学大学院 博士後期課程 黒瀬菜々)
- ②所属の異動 (福岡女学院大学 蘭紅艶)

5)書評

池田理知子・五十嵐紀子(編)『よくわかるヘルスコミュニケーション』(広島大学 高永茂)

6)その他の報告事項

- ①支部規約改正の報告 (支部長：池田理知子)
- ②熊本大震災の寄付金の報告 (池田理知子・平野順也)
- ③訃報

7)編集後記

1)支部大会報告

深謝：支部大会を終えて

支部大会実行委員長：平野 順也（熊本大学）

2016年10月22日（土）に熊本大学で第23回日本コミュニケーション学会九州支部大会を開催いたしました。支部大会の第一部は研究発表、そして第二部は基調講演とシンポジウムを行いました。参加者も多く、盛大な開催となりました。会場の変更など開始直後から皆様にはご迷惑を多々おかけしましたこと、お詫び申し上げます。支部大会を無事開催することができたのも、参加していただいた支部会員の先生方を始め、基調講演を行っていただいた赤木満智子様、高谷和生様、シンポジストの池田理知子先生、畠山均先生、そして事務局の筒井久美子先生のおかげです。皆様のご尽力に心より感謝申し上げます。

支部大会の第一部では、6名の先生方と6名の大学院生の方に研究成果を発表していただきました。九州内はもとより、新潟や千葉からも参加していただきましたが、「九州」という地域にとらわれることなく、研究者のコミュニティという性質が強いのも九州支部の特色といえるでしょう。また、今年度は大学院生の方々の参加が多く、新進気鋭の研究者にとって大変有意義な機会になったと思います。今回の参加を機に、一人でも多くの研究者が九州支部から育ち羽ばたいていくことになれば、実行委員長としてこれ以上の喜びはございません。九州支部大会で発表される大学院生の方には、

補助金が支給されますので、今後も活用していただきたいと思います。私自身、自分の発表の後は走り回っていましたので、先生方の発表をゆっくりと拝聴できなかったのが非常に残念でした。購入して5年以上たっているため、決して「慣れていない靴」ではないのですが、走り回っていたせいか、大会後靴を脱いでみると、右足の小指の爪が剥がれていました。しかし、大会中は痛みをほとんど感じなかったほど、没入していた、ということにかく一心不乱だったと思います。

午後の第二部では、最初に戦争体験者の赤木様の講話、そしてくまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク代表を務められている高谷様の基調講演が行われ、その後支部会員の池田先生と畠山先生に参加していただいたシンポジウムが続きました。会場には支部会員だけではなく、熊本市民の方々や熊本大学の学生がいらっしゃいましたが、そのことから、今回のテーマが研究者だけのものではなく、「市民」の興味と密接に関係しているということが理解できたのではないかと思います。コミュニケーション学の「目的」や「意義」を感じた時間でありました。

今回、「記憶と未来：71年目からの戦争史」をテーマに熊本で九州支部大会を開催したのも、その一年前に熊本県水俣市で同様のテーマ

で支部大会を開催したことが発端です。水俣市では「環境問題とコミュニケーション」がテーマでしたが、そこでは水俣市の深刻な問題だけではなく、過去の知識や財産をいかに未来に託すかといったコミュニケーション学の可能性（そして課題）についても学ぶことができました。水俣市で開催された支部大会の鍵語である、「記憶」、「未来」、そして「語り」は、今年度

のテーマでもあります。そして、これは次年度長崎県で開催が予定されている第24回日本コミュニケーション学会九州支部大会にも貫流しております。数年かけ、同様のテーマで支部大会を開催するというのは、初めての試みではないでしょうか。それほど、このテーマは、今後も議論し続けて行かなくてはならない、重要な問題だといえます。

2)支部活動予定

①支部紀要『九州コミュニケーション研究』 第15号の投稿論文募集

紀要担当運営委員：平野 順也（熊本大学）

『九州コミュニケーション研究』第14号より、紀要編集委員長を担当している熊本大学の平野順也と申します。

このニューズレターが皆さまのお手元に届くころには、『九州コミュニケーション研究』第14号も無事発行されていることと思います。貴重な研究成果を投稿していただいた先生方、特別企画に寄稿していただいた先生方、そして原稿の確認などご協力いただいた先生方に、この場を借りて心より感謝申し上げます。

まず、今回は1本の投稿論文と1本の研究発表論文が掲載されております。両方の論文には、執筆された先生方が日々取り組まれている活動の詳細が記されています。コミュニケーション学は、けっして机上の学問だけではないと思

います。我々の生活と切り離すことができず、多くの場合、社会の現状に異を唱え、問題解決方法を提示し、そして解決に向けて実際に取り組むことが求められます。執筆された先生方は単なる傍観者でも目撃者でもなく、コミュニケーション学研究者として、それぞれの論文の中で、現状の改善に役立つ知見を提示しています。今回掲載される論文は、コミュニケーション学研究者だけでなく、医療や学業に携わる人々にとっても貴重な研究であることは間違いないでしょう。

また、今回は「特別企画」も掲載しております。2015年度に熊本県水俣市で開催された、第22回日本コミュニケーション学会九州支部大会から、山下善寛氏の基調講演、また「水俣、

コミュニケーション、そして残渣される記憶」というテーマで2人の先生から寄稿していただきました。恥ずかしながら、拙稿も掲載されております。2015年度の大会テーマの根幹は2016年以降も計4年間引き継がれることになっております。『九州コミュニケーション研究』も今回から4年間、支部大会に共鳴する形で「特別企画」を掲載することになりました。今回は「特別企画4部作」の一作目が掲載されるというわけです。今後は、研究論文だけではなく、「特別企画」もより充実した内容をお届けできればと考えておりますので、もし妙案がございましたら、紀要担当の平野までご連絡いただければ幸いです。

ご都合もあり、支部大会に参加できない先生方も多くいらっしゃいます。支部大会に参加できなかった（時間や空間にもとらわれない）他

者である人々を、今後4年間は継続して取り組む「記憶」の語りに招待していこうというのが、「特別企画」の目的です。研究論文だけではなく、「特別企画」が一人でも多くの読者の手に届けば幸いです。

最後に、『九州コミュニケーション研究』第14号への投稿について説明させていただきます。今回も例年と同様に締切を2017年1月31日（火）としております。ご多用のところ恐縮ではございますが、奮って論文を投稿していただければ幸いです。第23回日本コミュニケーション学会九州支部大会で研究発表された先生方は、査読無しの研究発表論文、もしくは査読論文としての投稿が可能です。投稿におきまして何か質問などございましたら、遠慮なく平野までご連絡ください。

2)支部活動予定

②2017年度支部活動予定

副支部長：清水 孝子（日本文理大学）

支部活動の一つは支部大会の開催です。「記憶の継承」という大テーマのもと、2015年の第22回支部大会は、「環境問題とコミュニケーション」という大会テーマで、熊本県水俣市で開催されました。2016年の第23回支部大会は、「記憶と未来—71年目からの戦争史」という大会テーマで、熊本大学で開催されました。「水俣病の記憶の継承」そして「戦争の記憶の

継承」について、当事者たちを交えた形で議論を深めてきました。2017年の第24回支部大会は長崎市で開催されます。これまでの2回の支部大会のテーマを引き継ぎ、「被爆体験をどう語り継ぐか（案）」という大会テーマで、支部大会を開催する計画です。長崎純心大学の畠山均先生が大会委員長となり、現在計画を進めているところです。過去、長崎では支部大会は

3回開催されていますが、会場は全て長崎純心大学が使われてきました。2017年の第24回支部大会の使用会場については、アクセスも良く使用料金もリーズナブルな「長崎ブリックホール」(JR浦上駅から徒歩5分)の研修室を第一候補として検討中です。開催時期も、現在のところ9月下旬から10月上旬の土曜日を考えています。会場の申し込みが半年前からということなので、今回は確定した日程や場所をお知らせできません。

支部活動の二つめは、支部の紀要である『九州コミュニケーション研究』の出版です。吉武正樹先生の後任として、平野順也先生が第14号から新編集長として活躍されています。『紀要第14号』から、特別企画という形で支部大会のテーマに即した企画が組まれています。第15号でも、熊本大学で開催された講演やシンポジウムの内容を中心に特別企画を掲載する計画です。

支部活動の三つめは、ニューズレターの発行です。2016年の27号より横溝彰彦先生が編集長に変わられました。2017年は28号と

29号を発行予定にしています。

九州支部には、本務校が東京にありながらも何らかの形で九州と関わる人たちが会員として活躍中です。また、支部大会の場も教育分野だけでなく様々な分野や立場の人たちが意見を出し合う場になりつつあります。さらに、支部大会開催や紀要出版という活動が、学会員一人ひとりの活動と社会とを繋ぐ橋渡しの場になりつつあることを実感しています。今後とも、会員の皆様のご協力をどうぞよろしくお願い致します。



長崎原爆資料館 (資料館のHPより)

3) 会員からのメッセージ

①九州支部の今後の発展を願いつつー第46回年次大会に参加して

畠山 均 (長崎純心大学)

今年の第46回年次大会は「コミュニケーションとパワー」を大会テーマとして6月11日(土)と12日(日)の2日間、福岡市の西南学院大学で開催された。大会プログラムは学術講演(ユタ大学教授のケント・アラン・オノ氏による「The Shifting Landscapes of Asian

Americans in the Media」)、5件のパネルディスカッション、17件の研究発表で構成され、それぞれに活発な議論が展開された。私は20年以上、この学会に所属しているが以前は語学教育、それも英語教育関係の発表が目立ち、英語教育の学会ではないかと思わせる雰囲気

あったが、近年はその分野での発表は影を潜め、組織、レトリック、コミュニケーション教育、ジェンダー、メディア、文化等をテーマとした研究発表が多くなり、コミュニケーション研究のすそ野の広がりを感じる。

私は「九州におけるコミュニケーション学のオーラルヒストリー」と題されたパネルディスカッションにパネリストの一人として参加した。今年で2回目となるこの「オーラルヒストリー」企画であるが、今回は特に「九州における」という点に焦点を縛り、九州支部の歩みをオーラルヒストリーの視点から明確にし、日本におけるコミュニケーション学の歴史の一端を共有することがパネルの目的であった。司会はこの分野で精力的に研究を進めておられる師岡淳也先生（立教大学）で、私の他に橋本満弘先生（前西南女学院大学）、佐藤勇治先生（熊本学園大学）がパネリストを務め、丸山真純先生（長崎大学）がコーディネーターとして参加された。司会の師岡先生の質問に私たち3名のパネリストが答えていくという形で進み、橋本先生は主として現在の九州支部創設以前の九州でのコミュニケーション研究の実情や学会本部との関わりについて当時の資料等を示しながら話された。私は特に1994年の九州支部の発足後の約10年の黎明期について、佐藤先生はその後の発展期について話された。特に橋本先生の話された九州支部が立ち上がる以前に（つまり今から40年以上前）、既に西南学院大学や九州大学の教員、院生、学生たちによってかなり活発にコミュニケーションについての研究や議論が行われていた事は初耳で、現

在の九州支部の土台は40年以上前であったと感じた瞬間であった。

今回のパネルディスカッションへの参加は私にとって九州支部の歩みを再び振り返る良い機会となった。大会前に九州支部ニューズレター、特に初期の頃のを再読した。1996年1月に発行された支部ニューズレター第1号で私は「支部長挨拶」として次のように書いている。

支部長としての私の仕事はまず、九州沖縄地区でのCAJの知名度アップであると思います。少なくとも中・高・大の外国語関係の先生方から「日本コミュニケーション学会」と聞いて「それ何？」と聞き返されないような学会にしたいと思います。そのためには、毎年の支部大会はもちろん講演会や研究会の開催、定期刊行物の発行、支部会員による共同研究などいろいろな活動が考えられますが、何もかも一度にはできません。とりあえず、年に一度、支部大会を開催すること。そして、支部会員相互の情報交換の場としてのこのニューズレターをできれば年2～3回発行できればと思っています。

支部発足から20年以上を経過した現在、ここで私が述べている毎年の支部大会の開催、講演会や研究会の開催、定期刊行物の発行、支部会員による共同研究、ニューズレターの年2～3回の発行は、そのすべてではないが、多くは継続されている。何事も「始める事」も大変であるが、「続ける事」はそれ以上に大変である。

関係者が事の目的と価値を共有し、知恵とエネルギーを出し合っただけで物事は長く継承されずと考える。これまでの20年余り、支部大会をはじめとして、支部活動が継続されてきたことは支部会員をはじめ多くの会員の理解と協力なしには考えられない。特に支部大会が今まで途切れることなく毎年、開催されてきた

事の意義は大きく、ささやかではあるが日本コミュニケーション学会の発展に貢献してきたのではないかと確信する。パネルディスカッションが終わった時、私はこれからも九州支部が会員の研究や教育実践の発表の場として、さらに会員相互の知的啓発の場として発展していく事を心から願いつつ会場を後にした。

3) 会員からのメッセージ

② 私の研究テーマーポピュラー・カルチャーとナショナリズム

松島 綾 (熊本学園大学)

熊本学園大学外国語学部英米学科所属の松島綾です。日本コミュニケーション学会に最初に参加したのは1990年代半ばに北海道で開催された年次大会でした。その後、アメリカのニューメキシコ大学、アイオワ大学に留学し、しばらく年次大会に参加できませんでしたが、数年前から参加再開を果たし、現在は学会本部の副事務局長を担当しています。

私の専門はレトリックで、特にメディア言説における「日本人」の表象を分析することにより、テキストと映像、そしてその関係性が歴史的、社会的、文化的軸の接点で構築されるナショナル・アイデンティティの研究をしています。以下、これまでの研究と現在の研究を紹介いたします。

博士論文では冷戦終結後、1990年代に第二次世界大戦侵略者・被害者という相反する日本のアイデンティティがメディアでどのように表象されたかを分析し、日本のアイデンティティの再浄化を通し、被害者としてのアイデンティティが確立されるプロセスを考察しました。歴史教科書、加藤典弘と高橋哲哉の論争、漫画、映画を分析対象とし、それぞれに見られる日本、アメリカ、中国の三項対立に着目し、その対立により精神浄化を試みようとする構造を明示しました。すなわち、1990年代の精神浄化を占領期後に起こった敗戦からの肉体的浄化をたどった再浄化運動と位置づけ、ナショナル・アイデンティティの複雑さを示すとともに、二項対立(国と国との対立あるいはグローバル/ロ

一カルの対立)で捉えられてきたナショナリズム論に三項対立の概念を提示することにより、ナショナリズム理論にも貢献しようとして試みました。

現在は表象の可視性のみが主体の構築につながるのではないことを被害者・弱者の表象を通して分析しています。例えば嫌韓流の現象をポストコロニアルな視点から考察することにより、嫌韓流が不可視的領域に押しやる日本人性がナショナル・アイデンティティとして構築されていく過程や、長崎原爆資料館の訪問者が「見る」と「見られる」ことの両義的な役割を与えられ、主体を「見る」から「見られる」に転換させることにより、「人」ではなく「物」が語る戦争被害の背後に立つ半透明な主体の位置を獲得する過程を考察しています。また、韓国のポピュラー・カルチャーに圧倒され続けている日本

のソフトパワーをアジア中心に焦点を定めて展開する日本政府の「クール・ジャパン・プロジェクト」を日本とアジア、そしてアメリカの関係も視野に入れながら考察することにより、博士論文で考察したナショナル・アイデンティティ構築の三項対立に、アジアの一部でもありアメリカの影響がポピュラー・カルチャーに多く見られる韓国の位置付けも関連させながら考察しています。

今後もこのようなポピュラー・カルチャーとナショナル・アイデンティティの研究を進めていきたいと思っています。特に西洋の「人種」という概念が日本社会を分析する上で不十分だということを踏まえ、現代日本の人種とナショナル・アイデンティティの関係性を考察していこうと思っています。

最後になりましたが、私の研究に皆様のご意見やご教授をいただければ幸いです。

4)支部会員の紹介

①新支部会員： 黒瀬 菜々
(西南学院大学大学院 博士後期課程)



私がコミュニケーション学の世界に飛び込んだのは、解決しそうなコミュニケーションの問題に大いに苦しんでいたからでした。大学卒業後、福岡市内で日本語教師として勤めはじめたのですが、数年経ったころには、その学校にはアジアだけではなく、世界各国から学生

が集まるようになっていました。その中で、私たちはある学生たちからの主張や態度に「お手上げ」状態となったのです。「この宿題は意味がないからしない」「学費を払っている私たちが、どうしてあなたの言うとおりにしないといけないのか？」日本語学習に対して熱心な学生

にさえ、手を焼く場面が増えていました。

私たち教員のそれまでの問題意識は、どう教えようか、どうやって学習に集中させようかといったものでした。もちろん、教え方や日本語に対する理解は変わらず重要なものとして認識されていましたが、それ以上に私たちの関心は、どうやって彼らを説得し、どうやって日本の学校になじませるか、ということに向いていました。ところが現場でいくら悩んでも、何の答えも出ない。偏ったステレオタイプばかりが増幅し、彼らからの信頼感が得られているとも思えませんでした。そうして、現場だけではどうにもならないコミュニケーションを学問として学ぼうと決意したのです。

今回九州支部大会で発表させていただいたのも、そのような留学生とのやりとりから始めた研究でした。留学生と日本人教員から見たお互いの言動、その期待と実際をインタビューで明らかにしようと試みたものです。当然、それまでの疑問や悩みが解決するには未だ遠い道のりですが、今回の研究でいくつかの気づきがあり、それは形にはならないものの、私なりの収穫となりました。その一つは対話の必要性です。この言葉自体は使い古された表現かもしれませんが、やはり明らかに不足していると思うのです。インタビューでは、教員である私に対

して、本音で語ってくれるだろうかという心配をよそに、ほとんどの留学生は聞いてくれと言わんばかりに話してくれました。学校や先生たちへの信頼感、不満、驚きも、むしろ楽しそうに。私は聞き役に徹しながらも、彼らの考えをじっくりと聞く機会が今まで皆無だったことが不思議でなりませんでした。そして教員からも経験をたくさん聞くことができたのですが、それはあくまでも教員なりの経験、解釈であり、留学生との対話を通して得られた考えとは言いがたかったのです。

これは当然と言われればそれまでの、しかし見えていなかった落とし穴でした。留学生とのコミュニケーションにしばしば悩まされながらも、コミュニケーションについて自ら考え、留学生の考えを聞こうという意識が不足しているように感じたのです。

今回の研究を通して、一つの目標が見えてきました。文法や教授法だけではなく、コミュニケーションを自ら考えることの重要性が、日本語教師の世界でもっと認識されるようになることです。今後も、留学生と日本人教員のコミュニケーションのさまざまな側面に目を向け、耳を傾けながら、教育現場と研究を結びつける役割が果たせるよう努めていくつもりです。どうぞ今後ともよろしく願いいたします。

5)支部会員の紹介

①所属の異動：蘭 紅艶

(福岡女学院大学)

※西南学院大学大学院から異動



皆様、こんにちは。福岡女学院大学国際キャリア学部国際キャリア学科の蘭 紅艶と申します。国際キャリア学科は「国際舞台で活躍できる女性を育成する」という目標で3年前に設立された新しい学科です。私は Introduction to Communication や Communication Strategy、Intercultural Communication などコミュニケーション分野の科目を担当しています。

「国際舞台で活躍できる女性」とは響きが良い目標ですが、実現するにはかなり訓練が必要だと感じています。ビジネスマナー、プレゼンテーション、ネゴシエーション等は、競争が激しい中国での企業管理者指導の経験を基にしています。青島市では外資系5星ホテル開業に先立って全職員を指導し、北京市では医療機器会社のヨーロッパ販売経路拡張交渉に参加し、また、Dr. Edward de Bono 氏の世界大会では通訳を務め、Dr. Peter de Bono の水平思考訓練の助手として、その訓練受講生である中国のトップ企業家に接してきました。所謂キャリアウーマンとして働いて体験したことをいかし、来日後、西南学院大学大学院で学問としてコミュニケーション論を整理し直し、現在は福岡女学院大学でコミュニケーションを教えていることとなります。

人と人のコミュニケーションは、同質文化

内でも成長過程や学歴、社会的役割などが異なれば、同じ言葉が異なる意味で理解されたり、同じ姿勢が全く逆の意味で捉えられたりする可能性があることを中国社会で体験しています。しかし、異文化の場合は、予測できない背景や視点から誤解が生じ、戸惑うことが頻繁にあります。むしろ誤解されることを前提にして、誤解の度合いを如何に少なくできるかを考えるほうが無難かもしれません。

学習の分野だけに絞りますが、「なぜ学生達が英語を話さないのか」、「なぜ手を挙げて自分の考えを言わないのか」、「留学生を招待した時になぜ日本語でも質問しないのか」は、何年日本の教壇に立っても理解しがたいことです。

「高い授業料を払っているのに、なぜ必死に勉強しないのか」。一体全体なぜでしょうか。中国では、それは「興味関心が薄いから」、「意欲がないから」、「授業料を払っている保護者に対する感謝の気持ちがないから」と否定的にしか判断されません。異文化コミュニケーション論では、日本文化では集団を優先し、目立つ個人は抑えられるからとか、中学高校時代の英語教育は文法翻訳が中心であり、意見発表の訓練は受けていないからとか、さまざまな理由があげられます。何が理由であれ、そのような消極的な姿勢では、少なくとも中国で接していた企業

トップエリートと渡り合っている「国際舞台で活躍できる女性」にはなれません。

従って、授業では、講義よりも学生の発表や討論を中心にして、論理的意見構成の作り方、適切な視聴覚教材の提示の仕方、アイコンタクトやジェスチャーの使い方など指導しています。しかし、どれほど細かい点まで指示された内容を受け止めて、具体化していても、自分から積極的に話しかける姿勢が育たなければ、日本ガラパゴス内でしか通用しません。

授業外活動として、運動会やタレントショーを企画し、チームで目標をやり遂げることの達成感を学生に味わせて、またダンスや楽器演奏、ファッションショーを通して、人前に立つ勇気を奮い立たせ、自分の潜在能力を掘り起こさせます。これからも教育者の視点から、自分の経験を活かして、またさらに自分を磨いて、国際社会が求めている人材を育成するために努力していきます。

5)書評

池田理知子・五十嵐紀子(編) (2016、ミネルヴァ書房) 『よくわかるヘルスコミュニケーション』

高永 茂 (広島大学)

本書は、複雑化する社会の中で生まれてくる「病」とそれに係わる問題や疑問に応答する意味を込めて、ヘルスコミュニケーションというテーマのもと編集されたものである。コミュニケーションの技術的な側面だけでは対処できない問題が現代社会で増加しつつあることも本書が編まれた背景にある。

本書は全9章と6つのコラムから成る。9章それぞれに6~12項目が配されている。本書の内容をすべて丁寧に紹介するわけにはいかないので、まずは本書の構成を記す。

本書の構成は、「Ⅰヘルスコミュニケーションの地平」、「Ⅱ「病」の定義」、「Ⅲ社会と身体」、「Ⅳジェンダー・セクシュアリティ」、

「Ⅴ言語・非言語」、「Ⅵ表象と文化」、「Ⅶ個人・対人・家族」、「Ⅷ医療・介護をめぐる社会的状況」、「Ⅸ医療・介護の現場から考えるヘルスコミュニケーション」から成っている。コラムには「精神疾患の定義の危うさ」「高等教育における障害学生支援」などがある。全体を通じて、重要な基本的知識とともに最新の知見や豊富な事例を紹介しながら、ヘルスコミュニケーションの広がりや深さに触れられるように工夫されている。授業のテキストとしても使いやすいものとなっている。

さて本書に一貫してみられる姿勢は、「病」、「社会」、「生活」、「関係性」、「問い直す」ということばに集約されると評者は考える。さらに、

「病」を中心としながら介護、出産、障害者、公害被害者、マイノリティー、終末期ケアにかかわる問題まで射程に入れている点も本書の特徴と言えよう。

本書の目指すところは、医療コミュニケーションに関して万能のマニュアルを提供することではない。そもそもそのようなものは存在しないのかもしれない。本書では、コミュニケーションとは可変的で、関係性によって変わりうるプロセスであり、何がその場にふさわしいコミュニケーションなのかをあらかじめ決めることはできない、とする。

「病」と社会との関係を問い直すこと、日常生活の中でいかに「病」が構築されていくのかに意識を向けることが重要なのである。そのうえで、自分自身と社会や周囲との関係性を再考し、「病」の意味を再定義することが求められる。このような問い直し、とらえ直しを本書は

促していると思われる。例えばそのなかで、ケアするということは人間どうしの相互作用であり、お互いに成長し人生を充実させていくものだ、という気づき生まれるかもしれない。自分自身の「病」を語る行為が社会を変えていく可能性をはらむという本書の指摘は、同時にコミュニケーションのもつ力にも言及したものであろう。後半の2章（Ⅷ章とⅨ章）では、医療・介護の現場でどのようなコミュニケーション上の問題があるのかが具体的に提起されている。

一つの風景も見る側の立ち位置によって、異なる表情を見せることがある。患者（患者になり得る状況の人を含める）側から見た医療の風景と、医療者側から見た風景があるとすれば、本書は前者に重心を置いているように感じられる。

6)その他の報告事項 支部長：池田理知子（国際基督教大学）

①支部規約改正の報告

2016年10月22日の支部総会で、支部規約第3条の下記の変更が承認されましたのでご報告いたします。

(改正前)

第3条（会員） 本支部の会員は日本コミュニケーション学会会員であって、九州地区に居住する個人または団体とする。

↓

(改正後)

第3条（会員） 本支部の会員は日本コミュニケーション学会会員でなければならない。

②熊本大震災の寄付金の報告

日本コミュニケーション学会九州支部が中心となり集めました義援金の送付先である熊本大学の平野順也先生と、熊本学園大学の花田昌宣先生とともに活動されている水俣学研究センター研究員の田尻雅美さんから、感謝の言葉と避難所での活動報告がきておりますので、掲載させていただきます。

まずは、ご協力いただきました皆様に深く感謝いたします。皆様からお寄せいただいた義援金 60,784 円は、迅速に必要な方々へ届けさせていただきました。

熊本で義援金を募ろう、義援金を寄付しようとした運動が「公平性」をどう保つのかという問題に直面し、具体性を持たぬまま消えたという事実をいくつも目の当たりにし、悔しさを感じることもありました。そのようななか、必要な方々に迅速に直接届けるために、ボランティア団体や行政ではなく、被災した方々の側にいる熊本の私たちに義援金を託すという決断のもとに募金活動を始めた皆様のご温情に深謝いたします。

半壊や全壊といった被災規模は人によって異なりますし、また被災した方一人ひとりに皆様のお気持ちを届けることは不可能なため、義援金を誰にどのようにお届けしようか考えあぐねておりました。そして、それは苦渋の選択ではありましたが、あえて「不公平性」のもと、非常に限られた私の活動範囲内で確認できた被害を受けた方々を中心に お渡しすることを選びました。もちろん支援

が必要な方々は数えきれないほどいらっしゃるでしょうし、単なる拙速な行為だと捉えられるかもしれませんが、あの時、あの状況においては、それがたとえ最適ではなくても、適切な選択だったと思っています。

今回の震災では、熊本大学の教職員および学生のご家庭の多くが甚大な被害を受けました。そこで、お寄せいただいた義援金は住宅が半壊もしくは全壊し、避難所生活や引っ越しを強いられた熊本大学の教職員の方々 5 名と学生 2 名へお見舞金としてお渡し、また支援物資を購入して熊本大学が位置する熊本市黒髪地区の避難所へ届けさせていただきました。義援金や支援物資を受け取られた方々は、皆様の心温まるご厚意に感謝されていきました。私が代わりに受け取った感謝の言葉をここで皆様に伝えられないのが残念でなりません。

今後も引き続き被災地支援に可能な限り取り組んでいきますので、熊本の復興を今後も応援していただければ幸甚です。

平野 順也 (熊本大学)

4 月 14 日と 16 日、震度 7 の地震が続けて起こり、私たちは避難生活など不安な日々を送ることになりました。熊本学園大学では、14 日の地震後から 14 号館を開放し、2 度目の地震の後は避難所として最大 750 人が避難していました。私自身も 17 日から避難所運営にかかわり、もう一人の看護師免許をも

つ研究助手と朝方まで医療班として常駐し、数時間を車の中で寝る生活が 1 週間ほど続きました。余震が続く中(16日の余震は 1223 回)、炊き出しや衛生管理、掃除、ゴミ捨て、食料の確保など皆が協力し合う生活が続いていましたが、合理的配慮に基づく 24 時間体制の避難所も 5 月 28 日にその役割を終え

ました。現在は、仮設住宅などでのボランティア活動が中心となっています。

余震は徐々に減っているものの、4000回を超えています。もう一度、このあいだのような地震が発生したら……。まだまだ地震の爪痕は残っており、不安はぬぐいきれませんが、地震直後から多くの人的、物的、金銭的支援を頂き、これらの支えが熊本の人々に希望の光を与えているのだと思っています。

まさに、明けない夜はないと実感しております。

日本コミュニケーション学会九州支部の方々からも、寄付金を頂きました。迅速なその対応は、日頃からの研究の姿勢と無縁ではないと思っています。愛情あふれる皆様のご対応に感謝申し上げます。

田尻 雅美

(熊本学園大学水俣学研究センター)

③訃報：石川 直美氏

本学会支部会員で、沖縄キリスト教学院大学大学院を修了後、琉球大学大学院社会科学研究所博士後期課程で比較地域文化を専攻中の石川直美氏が、病気療養中の平成28年5月23日に死去されました。石川氏は沖縄で日本国籍とアメリカ国籍の親を持つ子どものアイデンティティについて研究を進め、『九州コミュニケーション研究』に論文が2本掲載されています。

第10号 平成24年 「沖縄の混血児の文化的アイデンティティ」

第12号 平成26年 「アメリカ系うちなーんちゅのアイデンティティと言語」

また、ニューズレター第23号の支部会員紹介にも寄稿いただいております。沖縄の方言を交えた自己紹介からは、温かいお人柄がうかがえます。

家庭ではよき妻であり、幼い子供二人の母親であり、家庭と研究を両立できるバイタリティーにあふれた方と伺っています。ご冥福をお祈りいたします。

6)編集後記 横溝 彰彦 (久留米工業高等専門学校)

「私たちの対話は敗北した。私は全ての人々の声を拾っていたわけではなかったことに気付いた。」昨年11月のアメリカ大統領選挙で優勢とみられていたヒラリー・クリントン氏が敗北した直後にアメリカ独立宣言の地フィラデルフィアで開催された NCA。Critical communication pedagogy に関するセッションで Deanna Fassett 教授 (サンノゼ州立大学) は肩を落としながらこう語った後、自分自身を奮い立たせるかのように続け

た。「男女差別、人種差別、宗教差別、それらに立ち向かうためには教育が重要だ。Critical scholars としてできることが、私たちにはあるはずだ。」

この発言を聞いた私は、教育や研究への情熱を語る恩師に活を入れてもらった気がしました。「熱さ」を持ち続けるにはエネルギーが必要ですが、その労力を惜しんではいけない、忘れてはならないものがあるはずだ、と。

発行元：

日本コミュニケーション学会 九州支部事務局

〒874-8577 大分県別府市十文字原1-1

立命館アジア太平洋大学 教育開発学修支援センター 筒井久美子

電話：0977-78-1111 メール：kyushu@caj1971.com

URL： <http://www.caj1971.com/~kyushu/>
